

地下深く掘ってつくられたもので、昼なお暗い全くの洞窟建物で、これが我々の収容所であった。

この収容所には、日本人将校約一万二千人、独逸人約二千人が収容されていると聞いていた。これからいよいよ抑留生活が始まるのである。

シベリア抑留の追想

和歌山県 野下善喜

昭和十五年九月、小柄な私は第一乙種現役兵として、各務原第一航空教育隊に入隊し、以後一般教練、特殊教育（写真工手）を終了し、それから四か月、後漢江に駐屯、五七飛行場大隊に属し、中支前線へ参加する。桂林作戦することになっていた。

その後、昭和二十年六月、満州国新立屯飛行場拡張工事に従事。八月十五日、滑走路拡張終了とほとんど同じところに終戦となり、新民停車場近くで武装解除を受け、その後、奉天の北陵において第四九作業大隊として編成

され、黒河を渡り、十月中旬、ブラゴエチェンスクを通り、十八日間の疲れた長旅の後、クラスノヤルスクの西の小さな駅で下車、用意されたトラックに分乗させられ、標高三百メートルくらいの山を幾つか越えて五十キロほど走ったところでトラックを降り、それからは徒歩行軍となった。

途中、集会所のような所でひと握りの黒パンが支給されたが、疲れのため、そのパンを食べると、だれも一言も語ろうとすることもなく、ごろりと横になって朝まで眠ってしまった。カンポイに起こされて、またまた行軍である。目的地まで十キロほどだという。降雪も激しく、下車駅よりは既に百キロくらい奥地のようだ。

そのうち前方に収容所らしいものが見えてきた。監視兵がそれを指さして、ラーゲルだという。上部は鉄条網を張りめぐらした板囲いのものだ。入り口は衛兵所、四隅の望楼にそれぞれ監視兵が立哨している。大小、十二、三棟のソ連独特の木材建築である。ペーチカの煙突が棟の中央に立っている。雪は既に二メートル近くも降り積もり、樹木もわずかに頭部を出している。ラーゲル

に入る前の景色の印象であった。

総勢七百五十人が七、八棟の宿舎にこれから収容されるのだ。中央通路の両側に二段ベッド形に設けられて、中央のペーチカがたかれれば室内は温かくなるであろうが、これからの生活はどんなものか。十日間くらい宿舎やバーニヤの整備作業で過ごしたが、与えられる食事が悪いので、これから本格的な労働に入った場合のことが心配だ。

三百〜三百五十グラムほどの黒パン、飯盒の中ぶた七分程度の燕麦スープ（底に沈んだ燕麦は数える程度よりない）、実際に日ごとにやせ細ってゆく戦友の姿や俺自身が不安でたまらなくなる。輸送中の心労と肉体的な疲労に加えて、極端に悪い糧食給与だ。

シベリアの寒さは今まで私たちが体験したことがないものだ。そのころから心配していたことが起り始めた。栄養失調による死亡者の続出だ。こんな悲惨なことがこの世にあってよいものだろうか。みなな話題は毎日のように故郷の食事のことのみで、そんな話をしていった者が翌朝、冷たくなっているのだ。

やがて、それから金鉱山での労働が始められた。二交替制で、宿舎から坑道まで約八百メートルをトポトボと昇り、カンテラを頼りに三百メートルほど入坑して行く。黒ずんだ今にも崩れそうな木製の階段を百メートル余りも降りてさらに進む。百メートルほど行ったらるか。ソ連人労働者が待っていた。これらソ連人たちと一緒に作業するのだが、四十キロにも満たない私の体ではソ連の女子労働者にも劣り、とてもついてゆけそうもなく、絶えず「ダワイ、ダワイ、ビストレ、ビストレ」の怒声がふりかかるのだ。

真っ暗な坑道での作業であるし、極端な栄養不足の状態であるため、下痢を訴える者が出始めて来た。収容所付の軍医大尉（日本人）が全力を尽くして治療しようとしても、ソ連軍の指揮下では、どんなに強く要求しても、医療品皆無では手の打ちようもない状態であり、やむなく非常手段として、満州から持参した戦利品の桶のタガ（竹の輪）を黒焼きにし、その粉末の炭を薬として飲まず。かようなありさまであった。

その当時のソ連側収容所担当当事者の意識について

は、私たちには想像もできない、次から次へと栄養失調の死亡者が続出する状態であるのに、何ら手を尽くすような素振りも感ぜられなかった。死亡者を埋葬するにせよ、四メートルもの積雪を除け、やっと現われた地表土は、十字鎌も鶴はしもはね返す凍土だ。長時間の作業でやっと埋葬をすませるのであるが、このようなことが何度も何度も続くのだ。

「ボタ餅を腹いっぱい食べたいな」と、昨夜語った隣の戦友の遺言になろうとは、朝になって冷たくなった体をまた埋めなければならぬ。このようなことが日増しに続くのだ。降り積もった雪は、宿舎入り口へのトンネルを掘らなければ入ることもできないし、屋根上の電線をまたいで通る状態であった。

灯もない真っ暗な部屋には、ペーチカの薪もなくなり、月一度のバーニヤもできない。二キロほど下った集落へ一回きりの入浴につれて行かれるのだが、途中、道端に転がっている馬糞が黒パンに見えて、思わず拾っては捨て、また次の者が拾っては捨てるといふみじめさであった。

あるときに、十人ほどでラーゲルから千メートルほどの地点にある集落に除雪作業の使役として出て行ったことがある。そのときに五十七歳くらいの婦人が私たちの作業を眺めていたが、監視兵がいなくなったときに、手招きして呼んでくれた。行ってみると、部屋の中のペーチカが赤々と燃えていた。黒パンと牛乳をさし出して食べなさいと言ってくれるのだ。私は思わずその婦人の顔を見つめたのだ。モンゴル系の人のだろう、再度食べよと態度で示してくれるのだ。私は胸にせまる感激でいっぱいになり、涙が出そうであった。深々と礼をして頂戴した。

婦人は手まねで、態度で語るのだ。「私の息子二人とも独ソ戦で戦死してしまった」と。人種差別のない国柄であるとは聞いていたが、この婦人からそのとき受けた好意は、現在の今でも忘れることのできないただ一つの私のエピソードだといえる。

このラーゲルに入所六か月を過ぎたある日、ソ連の要人らしい者の視察があり、死亡者の続出状態を知り、驚いて、このままでは大半を死亡させてしまうこと

になると判断したのか、急遽三十キロほど離れた伐採ラীগエルに移されることになった。当初の七百五十人中、病院送りと死亡者合わせて五百人余り、やっと働ける二百人余りが伐採に従事することになった。

前の作業所は、全ソ連収容所中で最悪の場所であると坑道で働いていたとき、ソ連人労働者に聞いたことがあったが、私がそこでの最後の入坑のときに、五十人ほどの若い娘たちと出会った。彼女たちは我々との交替要因だということで、何かソ連の法を犯したという罪のため送られて来たということを耳にしたが、何でも彼女たちはほとんどが女子大生だとうわささされていたが、真偽のほどは知らない。

翌日、またトボトボと三十キロを歩いて伐採地に向かう。この作業所も他の所と変わらず、二人一組で長い鋸（ピラー）斧（タポール）での作業であった。火力発電所用の薪の伐採で、一組のノルマは三立方メートルの薪を輪切にして積み上げるのである。すなわち原木を伐採して一メートルの長さに輪切にして、一メートルの高さに積み上げ、三メートルの長さ、幅分をつくらなければ

ばならない。何といっても食べる物も食べさせられずの労働だから、重労働中の重労働になったことは事実だ。

そのころ、お互いの生活の知恵というか、だれが考案したか知らないが、白樺の木に斜めに鋸目を入れ、小さな枝をさし込んで飯盒を受けておくと、糖分のある甘い水が溜るのだ。それを飲むのが楽しみであった。また、休憩時には草木の芽をつみ、飯盒にいっぱい詰めてラীগエリに持ち帰って、ベチカで煮て、塩味もなかったが、腹を満たし、飢をしのいだものだ。

このように、よい気候となる五月中旬以降はよいのだが、六月を過ぎるころになると、松類の樹木はヤニ（樹液）が出て伐採が難渋するのだ。それはヤニのために鋸が思うように動かなくなるからだ。そんなことはソ連側も知っているのか、伐採をやめて鉄道沿線のラীগエルに引き揚げた。

この収容所では、独逸や満州からの戦利品（略奪品）である機材類の貨車卸し作業を約一か月ほどやらされ、また移動してクラスノヤルスクに下車、もちろん当時は地名など知る由もなかったが、ここは当地方の中心地

で、大工場が林立している。

入った所は、機関車の修理工場。働いている同胞たちも機械技術者が大半で、ソ連側収容所所長以下も、日本人工員の優秀な技術を認め、給与も良好であったとか。

また優秀者には金銭も支給されていたとのことであった。しかし、私のような者は雑役工であった。でも、この収容所での数カ月は、これまでのところの待遇と差があったために、身体も大分回復したように感ぜられた。

そのうち、ある夜、うれしい情報が流れた。ソ連要人が工場を視察したらしく「当収容所は全ソ連作業所中最高の成績である。帰還の命があれば第一次とする」と発表されたということであった。翌日からの工場内はダモイ一色となり、我々を喜ばせてくれた。

それから一週間ほどたったころ、明日列車に乗る準備をせよと、ソ連将校から言い渡された。翌日、広場に集合、検査を受け、乗車、列車は東に向かって走る。今度こそ間違いなく東へ向けて走っているのだ。だまされ続けて来たことが、今確かにダモイだ、幾日かの後、望望のナホトカに着いたのだ。

ナホトカでは、ソ連側発表では日本からの配給がないので、待機するようということである。この二年間気長さを養われたような毎日であったが、ここでも待たされた一か月はまた長かった。やっと乗船することができた。乗船後三日目、舞鶴港への入港である。しかし私にとっては入隊後、七年ぶりに見る故国、舞鶴港のそれはそれは美しい景色であった。時に昭和二十二年五月九日、第一大拓丸、忘れようとしても忘れることのできないシベリア、そして彼の地に眠れる多くの戦友たちから合掌して、今七十歳を迎える私である。

ああ舞鶴港

和歌山県 稲葉 武男

“母は来ましたが、今日も来た、この岸壁に今日も来た、届かぬ願いと知りながら、もしや、もしや、もしや、もしやにひかされて”

二葉ゆり子さんの哀恋の唄である。吉田正さんの異国